

# ライフストーリーとまちの記憶についての一考察 ——「織物のまち」桐生に暮らす住民の事例から——

関 村 オリエ

Memories of “Fabric Town”: An Examination based on the Life stories of Residents

Orie SEKIMURA

## 1. はじめに

大都市圏外縁部においては、郊外化の終焉やこれにともなう都市圏の「縮小化」傾向（井上 2014）のもとで、過疎化・高齢化が急速に進行している。またこの一方で、人口や産業の大都市への一極集中が進み、全国の地方都市においては、若年層の流出によって少子高齢化と人口減少が進み、存続が危ぶまれる「消滅可能性都市」までもが指摘されている（増田 2014）。増田によれば、「消滅可能性都市」とは、人口の少子化や人口移動に歯止めがかからず、将来的には消滅する可能性がある自治体のことを指す<sup>1)</sup>。この中では、日本の各地方自治体では、20年後の2035年までには、首都圏のほとんどの地域（自治体）において高齢化率が平均10%以上増加し、関東の外縁部では高齢化率が30%～50%になるという推測もされている（日本創成会議・人口減少問題検討分科会 2014）。

グローバル化の影響を受けた主力産業の衰退、人口減少や少子高齢化を経験する地方都市においては、従来の産業の復権や経済活性化、これに付随するような人口増加の議論が盛んになされ、これまでの時代のような成長路線が志向されてきた（平沢 2012）。特に、2000年以降の地方分権の政策では、地方交付金などの再配分が縮小化する一方で、地域の自立性が強く要請されており、今後期待される新たな産業や人口増加のための施策が注目を集めている。しかし、日本の人口規模は、緩やかに減少傾向に向かいつつあるため、従来路線の経済活動や人口回復の議論が目指される一方で、地域の高齢化や過疎化などに由来する住民の生活や福祉の問題も生じており（広井 2015）、地域の持続可能性<sup>2)</sup>はつねに後回しにされてきた。何よりもこうした状況から危惧されるのは、市場経済のような競争の中に投げ込まれた地域の存在が、いつのまにか画一的なものとなり、そこにある経済合理性や優位性こそが評価の指標であるかのように切り取られていくことである。

「等価的」な世界を志向するグローバル化や、その世界を非対称に固定する新自由主義の潮流の中で否定されてはきたものの、ローカルな慣習や文化、個別具体的な地域の営みを再確認することこそが、今後、縮小化を生きる日本の諸地域の新たな論点になる（平沢 2009；2012）。そこには、当然、可視化され得ない歴史や、均質化され得ない記憶も含まれてくるだろう。そこで本研究では群馬県桐生市を事例として、産業構造の変化や高齢化、人口減少にともなう地域変容を、とりわけ住民の地域との関わりを通じたライフストーリーから分析することで、彼／彼女たちの語りから見えるまちの記憶を個別具体的な歩みとして捉えなおし、これまで見過ごされがちであった住民の地域に対する愛着や親しみを改めて検討することで、今後、彼／彼女たちにとっての生きる場所としての地域を考察することを目的とする。

## 2. ライフストーリーを通じて見るまちの記憶

近年、地方都市の諸地域においては、農業や工業など地域に脈々と受け継がれてきた歴史をもつ産業が衰退し、人口減少による地域社会の崩壊や、生活のための利便性の低下が問題視されている。こうした見方は、同時に市場経済に通じるような経済的能力を欠いた地域の姿や、近代的・都市的なインフラや生活基盤の持続を危ぶむ（憐れむ）画一的な捉え方により創出されるものである。だが、これら地域や場所には、長い時間を通じて育まれてきた人びとの親しみやアイデンティティがある。当事者が生きる現実の生活や彼／彼女たちの実践の中では、仮に外部から「衰退」や「減少」とささやかかれても、まちは今も昔も変わらず「まち」なのである。こうした過去と現在の関係における、自己のアイデンティティの正当性をめぐり、場所の記憶は重要なものとなる。我々はいったい何者であり、どこへ向かっていくのか。こうした一連の問いの中で、記憶は過去と現在を取り結びながら、未来につながる人間の社会・文化的な営みを支えるものとして焦点化される（若林 2008）。

また相澤（2005）は、ある特定の場所と記憶との関係について、アルヴァックスの『集合的記憶』を参考にしながら、場所は記憶を共有する集団の成員にしか理解できない意味を持ち得るものだとしている。それゆえ、場所は記憶を媒介とした場所と集団の相互作用によって構築され続ける存在であるとする。相澤はこのことから、記憶は「人びとに蓄積された経験・感情などの総体が、保持・解釈・想起・忘却・再解釈などによって意味づけられる個人の内面的な過程であると同時に、伝達や共有などの集合的な過程によっても構築され続けるもの」であると定義する（相澤 2005）。つまり記憶は、個人の内面ばかりではなく、場所といった形をとりながら、社会的・文化的にも構築され変化し続ける概念なのである。そのため、地域やまちなど、ある特定の場所の持つ意味を真に検討する上では、場所とそこで生きてきた人びとをともに媒介する記憶の存在は極めて重要なのである。

ところで、個人や場所の記憶を紡ぎ出すストーリー（語り／物語）は、歴史史料としても位置付けられてきた。歴史史料としてのストーリーを追究するオーラル・ヒストリー研究では、①声を残せない人々の声を収集する more-history の時期、②文書史料／口述史料に同等の権利を認め、従来の歴史研究の前提を捉え直す anti-history の時期、そして③個人の証言の中にある主観的なものに価値を見出し、語られる内容の意味を問う how-history の時期、そして④90年代以降の public-history の時期を経て展開してきたという（山田・落合 2008）。この流れに沿えば、インタビューの回答者が、単なる受動的な「回答の容器」ではなく能動的な「ストーリー・テラー（storyteller）」であるという近年の共通認識は③に根ざしたものであり、さらに地域の人びとを結び付け、歴史、社会的法律、精神的な真実、家族とその社会（集団）の文化的価値を含むストーリーの（再）評価に関しては④に根ざすものと考えられることができる（Atkinson 1995）。

本研究が調査手法として採用するライフストーリーは、質的調査の一つとして位置付けられている。質的調査に対して量的調査（法）は、マクロレベルの構造に対象を位置づける上で有効だが、既存のカテゴリー体系を前提としているために、常に主流派の性別・人種・階級以外の人間の経験（とりわけ、マイノリティの経験）を取捨選択し排除してしまうことが指摘されてきた（Mattingly and Falconer-Al-Hindi 1995など）。これに対して質的調査では、その都度、カテゴリーを流動化・文脈化したりすることによって、カテゴリーを規定するバイアスさえも研究対象として提示することで、調査者の「客観性」への向き合い方を問題化しようとする（Moss 2002；大久保 2009）。こうした方法は、周縁化された存在を改めて掘り取り、可視化するという点で適した方法といえる（桜井・小林 2005）。本研究で使用するライフストーリーとは、人生や過去の経験、さらには記憶

についてインタビューを通じて、人々のアイデンティティや生活世界を理解するための調査手法である（北澤・古賀 1997）。桜井は、ライフストーリー研究では、調査者がインタビューを通して被調査者一人ひとりの人生における文脈を構築することに参与し、語り手や社会現象を理解・解釈する共同作業に従事すると述べている（桜井編 2003）。本研究ではこのような、量的調査において見落とされがちであった住民の個別具体的な実践の姿を詳細に分析するために、ライフストーリーを手掛かりとしてまちの記憶を分析・検討したい。

### 3. 研究対象地域の概要

研究対象地域である群馬県桐生市は、群馬県の東端に位置し、桐生川の扇状地に発達した機業都市である（山口 1975）。桐生市の総面積は約27,457haであり、人口約11万4714人の都市（2015年現在）。JR 両毛線をはじめ計4本の鉄道を有しており、また国道等によって太田市や伊勢崎市へのアクセス、また足利市、佐野市など隣接する栃木県の各都市へのアクセスが優れている（桐生市史編纂委員会 1961；斎藤 2009）。

桐生の機業は、買継商、糸商、染物整理などに分化して市街地全域に拡大した。もともと谷口集落であった桐生は、江戸時代に徳川幕府の天領として桐生新町がつくられて以降、「西（関西）の西陣」に対して「東（関東）の桐生」と呼ばれ、絹織物の産地絹市を核として発展し、隣接する山麓の足利と共に一大機業圏<sup>3)</sup>を形成していった（斎藤 2009）。始めは農家の副業であった機織は、桐生新町に展開する絹市により組織化された16世紀末以降、本格化していった。その後、1738年には西陣から導入した高機<sup>4)</sup>を導入し、技術指導を受けるなどしながら、高級絹織物の生産が始まった。およそ半世紀を経た1783年には、桐生において八丁撚糸機<sup>5)</sup>が独自に開発され、縮緬機の基礎が築かれた。桐生の織物は、その後もさまざまな技術を開発し、江戸に向けては金襴緞子などの産地として発達したため、全国的に知名度を得るようになった（群馬大学教育学部地理学教室・群馬大学地理学会編 1989）。

明治期に入ると1872年に力織機を、1877年にはジャガード機を輸入して、ヨーロッパ諸国を参考とした機業の技術革新に努めた。1879年に開発された「羽二重」は、アメリカに輸入されるようになり、織都桐生の名声を国内外に一層広めることになった。大正期には、新繊維の人絹糸が登場し、桐生の企業は伝統技術を基礎に近代的な軽工業を発展させていった<sup>6)</sup>。しかしながら、第二次世界大戦下において、空爆を免れたにもかかわらず、桐生の機業は力織機など機械類の供出やこれにともなう廃転業を迫られ、産業にとっての重大な影響を受けたのである（斎藤 2009；桐生南ロータリークラブ 2010）。

戦前までは、機屋が賃機を支配して近隣の農村部で行われる、昔ながらの家内工業的色彩が強い桐生の織物業であったが、戦後は、織物原料の人絹化や、アメリカ、ヨーロッパを中心とした輸出品物の増加、分業ではない工場の一貫化が回復の原動力となった。特に、国内向けの織物が着尺や帯地などは工場制工場のプロセスの中で生産された（桐生市史編纂委員会 1961；斎藤 2009）。その後、桐生の企業は国際世界との競争力（低賃金に支えられたインドや中国の繊維製品）に圧倒され、1970年代をピークに構造変化を余儀なくされていった。こうして戦後の桐生における織物産業は、パチンコ<sup>7)</sup>、ミシン、自動車部品などの機械金属系産業への転換<sup>8)</sup>を遂げていった。

桐生市の近年の人口は、1980年代後半から1990年代後半までの10年間に大幅な減少を示し、それ以後も毎年約1,000人程度の割合で減少している<sup>9)</sup>。1975年から減少に転じた市内の定住人口は、1980年に入ると太田市に追い越され、県内では第4位の人口規模をもつ都市となった。また、人口減少と地域の過疎化にともなう空き家・空き地問題も顕在化している。著者はこのような中で、中

心市街地に暮らす4名の住民のライフストーリーを収集し、分析・検討した。4名は、かつて地域の基幹産業であった織物業や、これに関連した機械製造業に従事した人々である。彼／彼女たちのライフストーリーを通じて得られたまちの記憶から、桐生という地域や場所がどのような意味付けをされてきたのか、彼／彼女たちが構築するアイデンティティと桐生のまちについて考える。

#### 4. 住民の語りに見られる「織物のまち」

##### 4.1. 自動車機械製造会社に勤めたAさん

Aさんは福島県生まれの83歳。第二次世界大戦中に父親が中国へ出征したため、父親の実家があった桐生市へ母と兄弟で移り住んできたことが桐生の生活の始まりであった。

「戦争がなければ、ここにもいなかったし、今日お会いなんかできなかったわけ。小学校4年まで、福島県の、中通りの白河市っていうところに住んでいた……父親の実家が、桐生だったもんですから、きょうだい4人母親が連れて、父親の実家のここへ。(中略)だからここへ引っ越した時、こんな話するとあれですけど……全然もう生活がもう、こちらは(違う)。なんとなく豊かな感じでね。もう学生服、着る服でも何でもね。コロッケなんか肉屋さんで毎日売っててね(笑)。好きな時に買えて『わ、すごいなあ』なんて」

Aさんは、桐生市内の小学校を卒業後、桐生中学校に進学した。その後、中学校3年生(15歳)のときに学生動員により鋳物工場へ、翌年には市内の機械製品工場へ動員される。機械製品工場働いていた1945(昭和20)年に終戦を迎える。

「その渡良瀬川の向こうの下の方の所に、〇〇〇機械(工場名)があったもんですからね。一時間じゃ行けなかったかなあ……だけど結構ね、楽しかったんですよ?同級生がいて好きなことしゃべってね。パチャパチャパチャパチャしゃべっていると、向こうまで着くわけ。一時間くらい。歩くのは割合気にしてなかったですからねえ」

戦後、父親が中国から帰国した。Aさんの父親は戦前には国鉄で働いていたが、再び国鉄に戻ることはなく、帰国後から70歳の定年まで桐生の織物組合で働いた。Aさん本人は、1947(昭和22)年に18歳で桐生市内の自動車修理会社に就職して働き始める。会社は、自家用車やバスの修理、車体改造を行う会社で、当時市内では最も大きな会社のひとつだった。

「自家用もあったし。それで車体をね、特殊な車体を作ったりして。……普通の、あの農業のエンジンだとか、そういうあれをね修理もしましたけど。だから結構、修理工場としては、一時多いときは100人くらいいたんかなあ。(中略)昔、機の関係の仕事をしていたでしょう?だから家業が、機の関係なんかしていると、子どもたちもみんな工業(関係の職)へいったんですよ。昔はね」

1950(昭和25)年、一家は桐生市内の住宅へ引っ越す。その後、その住宅について分譲が可能になったため、買い上げて2階建てにリフォームをする。妻(78歳)とはAさんが29歳の頃、最初の就職先である自動車修理会社の社長夫人の紹介で、見合い結婚をした。その後、2人の息子に恵まれた。終戦後、18歳から就職したAさんは、会社に46年間勤め続けることになったが、決して裕福な青年時代を送らなかったAさんは、子どもたちには学をつけさせようと、市内の中・高校に通わせ後、東京の私立大学まで進学をさせた。

「仕事の都合でね、イラクの首都のバグダッドへ。1ヶ月くらい行ってたことある。今じゃもう怖じ気づいて行けないけど。商社の人が多少通訳はしてくれたけど……通訳なしだと、自動車の説明なんか(笑)。まだ若かったんかな。(中略)46年も勤め続けて色んなことあったけど……自動車の修理工場の職員なんて、社会的な地位はうんと低かったわけ。なんかね、

運転手より低かったな。新聞出たの、今でも覚えてる。(中略)……小学校6年生で学校辞めて、家が貧しくてね、どうにか働かなくちゃならないっていう子が、何人か来てましたよ！  
同じ家に同居していた父親は76歳、母親は93歳で他界した。一時は桐生市に戻ってきた長男の家族と共に暮らした時期もあったが、現在まで妻と2人暮らし。長男は市内の税務署、次男は東京にある食品会社に勤めている。

「(息子と一緒に住んだが) 3年くらいでもう転勤があつて。やっぱりここから通える所、場所ね……帰ってきたんですけど。だけど今はもう向こうへ引っ越しちゃったから。でもやっぱり、孫と一緒に住んでたから。色々ね、思い出がありますよ。(中略) そんな広い所じゃないし、もう2人だからね。どんなに狭いところでも……寝れるだけ。寝れるだけのスペースがあつたら、もうそれで。なんか計画があつたってコレ(お金)がないんですもん。年金だけだから、本当に」

#### 4.2. 織物会社社長のBさん

Bさんは、1931(昭和6)年生まれで82歳になる。現在の家族構成は、妻(80歳)、長男(52歳)、次男(50歳)、三男(49歳)である。埼玉県秩父市生まれ。実家は農家で、秩父の中学校を卒業後、親の知り合いが経営する秩父銘仙の織物工場で修行し、織物の全工程を3年かけて習った。

「あの……とにかくね、機を勉強して自分で帰って自分で商売をやるようになってゆうことだった……三男坊なんで。あの頃はほら学校も、あれですがね、今で言うとまあ中学。それを卒業して(桐生へ)来ました」

その後、先進技術を学ぶため、1951(昭和26)年に20歳の頃に桐生市へ織物の技術を学びに来た。これが桐生市に暮らすきっかけとなった。桐生で織物の技術を学び当初は、3年ほどの滞在を経て、地元の秩父へ帰ろうとしたが、Bさんの義理の父となる社長から会社を継ぐように頼まれた。加えて、B家には子どもがいなかったため<sup>10)</sup>、B家の名も継いでほしいと頼まれた。しばらく悩んだ末にBさんは養子となり、会社を継ぐことを決めた。織物業を担う後継を育ててきた社長の努力に感銘を受けたためだという。

「今の父も色々、苦勞した人なんです。将来的にはああだこうだっていう……話をして。『じゃあ私も桐生の、いわば土になりましょう』と、自分でやるつもりになって(家を継いだ)。一緒になってやりましょうと。まあ、(秩父に帰るのを)踏みとどまったわけですよ。(中略) だから例えば、(将来的に後継者として再び)婿さんもらったら婿さんを、私が教育してくれと。私の教育は親父がしてるわけだから。(中略) 死んだその親父もね、あの、自分で(家業を)始めたわけだけど。始める前は、足利のほうの小僧かなんかで、一生懸命修行した時代もあつて」

1955(昭和30)年に桐生市内に敷地を購入し、工場を稼働する。従業員は、多い時で60人程度いたという。従業員用に寄宿舎も作り、10人程度住み込みの労働者もいた。1958(昭和33)年、妻と結婚。妻は取引先の娘であった。工場規模を大きくし、仕事も順調となる中、その後、3人の息子に恵まれた。

「桐生へ来るときには、んー桐生ってところは、今で言う『東京』。おっかねえとこだよと、子ども出すんに……という風に言われて、織物の技術を習いに来たわけなんです。(中略) (当時、会社の敷地には)三連のこぎり屋根があつて、これの向こう側に、またのこぎり屋根があつたわけなんです。この建物を食堂にしたり、下を事務所にしたり、それから『検反』って、生地をこう検査する検査場にしたりしてね。この倉は原糸の倉庫かなんかで、成形工場っていうんで、その工場が。だからこの敷地ずーっと(工場だった)」

Bさんの工場には多様な織り機を整備し、最盛期には輸出織物を幅広く手掛けていた。旧ソビエトや南アメリカを除く、ほとんどの国々に織物を輸出していた。戦後、高度経済成長期の時期は国策で輸出規制をかけられることもあったが、日本の織物の評判は良く、輸出は好調であった。Bさんはその間、機屋へ自社製品の営業をするため、アメリカ・ニューヨーク州などにも出かけて行った。

「たとえば、アフリカで言うマフラー。それから、中近東……パキスタンとか、イラン、イラク、アラビア。あの辺のところも、縮緬で作ったね。(中略)それから、インドとかなんかもほら、サリーってんか。(中略)……それからアメリカは、ネクタイと洋服の裏地とか。シス地でね、裏地になるわけです。シスってゆうのはあの、もろっこいから、そのつるつるする。……はっはっ、絹で裏地に持ってこいな」

1973(昭和48)年から1976(昭和50)年までは、織物工場の人手もなくなり、また新規事業を立ち上げるため、近隣の笠懸町でラッセル機を使った編み物製造を始めた。ラッセル機は、ドイツから輸入する最新の大型機械であった。そのため、笠懸に新たに広い敷地を確保し工場を作った。笠懸工場の従業員はわずか6人程度であったが、導入した大型編み機のおかげで桐生工場と同様の売り上げをあげていた。

1986(昭和61)年に、Bさんが55歳の時に社長となった。だが、バブル経済の只中ではあったが、当時、織物産業のおもな舞台は、すでに材料の原価と人件費の安い中国やインドなどの新興国へとシフトしていた。

「最初のうちはね、中国から原料を入れて。で、こっちで製品にして出そうと、というようなことをやったんですよ。だからその場合は『保税』ってゆうんで、原料に対して税金をかけない。それで、今度はアメリカ輸出をやると。(中略)最初の頃は、原糸を、そうゆうふうに中国から入れて、こっちで加工して、製品を出したと。そのうち今度は、製品が中国の方でできるようになってくるわけだよ」

Bさんが社長を引退して、息子さんへの代替わりをしようとしたが、長男が跡を継ぐことは結局なかった。ほかに後継者もあてもなく、さらには桐生市内での織物産業も海外の生産地との価格競争激化のため、厳しい現状にさらされていることを目の当たりにしたBさんは、別の製造会社に敷地を売り渡し、会社の工場を閉めた。Bさんの工場は、すでに1976(昭和51)年に終業した桐生工場に加え、2000(平成12)年に笠懸工場が終業した。

「いわゆる織物業っていうのは斜陽産業で……まあ、先の見込みがない産業だっていうような。世の中の状態っていうか、ね?世情はそういう状態にもなったろうな」

#### 4.3. 縫製業を営んだCさん夫妻

Cさんは、1925(大正13)年に新潟県旧古志郡東滝沢村(現長岡市)で生まれ、85歳になる。14歳の頃、高等小学校を卒業すると同時に、父が「募集係」として携わっていた桐生市の紡績会社にCさん自らも就職し勤務するため移り住んだ。Cさんの妻(以下、C夫人)は、1930(昭和5)年に桐生に生まれ、80歳である。実家は、機織りを生業としていた。20歳の時にCさんとお見合い結婚をし、娘1人に恵まれた。

「(父親の仕事は)あの新潟の方の田舎あたりから、まあ変な話だけど、女性の機織りさんを募集してこっちに連れてきて……そういう(仕事)。(中略)(連れてきた機織りさんが必要な場所が)いくつもあるわけです。あっちもこっちもって、連れて行ったりしてね」

会社が所有する男性用の寄宿舎に寝泊まりし、昼は工場で織機の稼働に携わり、夜は繊維関連の知識を学ぶために高専に通った。

「染色関係が主でしたね。勤めながら夜学校行ったんですよ。夜間部っていうのがありまして、高等工業に。織物とか染色とか。(上司から)夜は夜学で勉強してこいなんて言われて。(中略)あの、朴歯という下駄はきましてねえ。音出せるんですよ。腰に手ぬぐいぶら下げて(笑)。カランコロンカランコロン、鳴らすわけ、わざと。わざととちゅか……。カランコロン。その鳴らし方が上手、下手がありましてね」

「(C夫人)今でいうちょうど地場産(桐生地域地場産業振興センター)のところに住んでたんでたわけですよ。皆さん、高等工業生は……。(通う先が桐生の)天神様でしょ。あそこまで朝、皆歩いて。……今じゃ『えー、あそこまでえ!』って言いますけど。2キロぐらいありますかね?」

Cさんは、染色を学んだ工業高専を卒業後、今度は東京の夜間学校で精密機械工学を学ぶことになった。これを契機に1942(昭和17)年17歳の頃に日本橋にある本社に異動した。住居のあてもなかったCさんは、桐生市を離れて浅草近辺の親戚や知人の家を頼り、3か所ほどを転々としたという。戦時中は、兵役のため陸軍病院で衛生の勉強をした。

終戦後、本社が一時的に静岡県的小山町の工場に移され、そこで2年間勤務。本社が東京に戻ると同時に東京へ移った。東京に戻ったCさんは、新宿区阿佐ヶ谷の男子寮に住まい独身時代を過ごしたが、1952(昭和27)年の時に28歳で結婚をし、神奈川県平塚市にある社宅に移り6年間を過ごした。その間、子どもが誕生する。

「所帯持ってから、結婚してからだよ。(中略)その時、社宅が平塚にあったんですよ。そちらの方に……住んだんです。そっからまあ、『東京人』みたいな格好してね?(笑)。渋谷まで出て、渋谷から地下鉄でガーッと出て……」

「(C夫人)そのあと会社の方の方針で、『平塚から日本橋まででの通勤は遠い』ってことで、横浜に新しく社宅作って、そちらに住んでおりました」

平塚から横浜港北区の社宅に移り住んだCさん夫妻は、横浜の社宅に11年間住み、転勤により埼玉県大宮に移り住んだ。大宮では自宅を購入して、5年ほど住んだ。C夫人は、大宮に住み始めた頃から自ら得意とする縫製の仕事を自宅で始めた。Cさんは、1969(昭和44)年57歳の頃に長年勤めた紡績会社から電子メーカーに転職し、そこで3年ほど勤めて定年退職を迎えた。

Cさんは、退職と同時にCさんの両親が暮らす桐生の実家に引っ越した。桐生市に戻ってからは、C夫人は自身の実家の裏庭に小さな工場を建てて、大宮に住んでいた時代から始めた縫製業の仕事を続けた。注文があれば、カクテルドレスやウエディングドレスなど複雑なドレスの修理も手掛けた。Cさん自身はすでに勤め人としては引退をしていたが、桐生の地で新たに縫製業を営むことになった妻の仕事を手助けしていた。現在は、この縫製の仕事も辞め、県内の大学に通う孫(娘の長男)と共に静かに暮らしているという。

「(C夫人)結局、桐生はその頃縫製や何かが盛んでしたから。まあ、独身時代から好きでしたから、そういう仕事。(中略)枚数……着数が多くなるもんですから。それで機械でもって、こうギシッと。そういうのがちょっと女性ではできないところもありましたから。重い機械を動かすのは難しいんで」

「裁断係っていうのは大体、企業あたりでも男性軍がやってた……。 (中略) (退職後は裁断係を)やらしてもらったような感じだけだね。どっちかっていうと威張る方は……女房の方が威張りますよねえ(笑)」

## 5. おわりに

本研究ではまちの記憶を捉えるひとつの事例として、産業構造変化や人口の少子高齢化を経験する群馬県桐生市の住民のライフストーリーを検討してきた。彼／彼女たちのライフストーリーからは、個人の内面から紡ぎ出される記憶が、個人や家をめぐる記憶として渦巻くこともしばしばあったが、時折、地域やまちを舞台にした集合的な記憶として表出することもあった。今回は、特定の行事や建造物を尋ねるようなことはなかったものの、人びとは一様に個人の経験や人生の歩みとともにまちの記憶を語り、その語りからは地域の個別具体的な歩みを確認することができた。このことは、先行研究(たとえば相澤 2005)でも指摘されていたように、地域や場所の記憶が個人のアイデンティティと非常に密接な関係にあることを示すものだった。同時に、親しみの感情を寄せて語り、記憶する地域やまちが、人びとにとって個別的で代替不可能な場所であることも示すものだった。

彼／彼女たちはいずれも80代であり、一番若くても10代前半で戦争を体験し、戦中、戦後期からその後の高度経済成長期を経て、織物や関連する機械産業の働き手として生きてきた世代である。しかし、そこに語られる個人的な経験や記憶は、国や政府というようなナショナルなアイデンティティを漂わせるものでは決してなく、あくまでも仕事や生活が展開される家庭・地域という場所を中心とした、ローカルな行為主体としてのアイデンティティを強く感じさせるものであった。たとえば、織物業や繊維業の知識や経験、職人として職業に従事する際の高い誇りなどの語りは、個人のアイデンティティをうかがわせるものであったが、これらは産業や景観といった集合的・社会的な事柄と重なり合い、地域の記憶を浮かび上がらせるようにも思われた。桐生は地域内で完結した織物業の分業体制を特徴とした特殊な場所であることは否めないが、成熟した地域の記憶を考えるための一事例として捉えることができた。

昨今、日本の地方都市をはじめとする諸地域は、経済の成長など画一化された判断基準により、大きく分断され、力を失った地域はまさに「衰退」への道のりを歩み出しており、その有効な解決策はほとんど示されていない。地域は自助努力により、この状況に対する知恵や工夫を凝らしている。ゆるキャラやご当地グルメ、世界遺産に至るまで、地域は自らもてる土地の資源を切り売りして、突然始まった地域間競争を生き抜こうとしている。だが人びとが暮らす地域について、何とか「生き残る」以外にどのような選択肢があるのだろうか。競争以外に地域が豊かに生きる道は、本当に残されていないのだろうか。本研究からは、住民たちのライフストーリーとそこで見えた記憶から、個別具体的で交換不可能な地域や場所の存在が見えてきた。今後はいかに地域がアイデンティティを構築し、人びとにとり末永く「生きられる場」として存在し続けることが出来るのかを考えていきたい。

### 註

- 1) 「消滅可能性都市」の推計では、「20～39歳の女性の数が2010年から2040年にかけて5割以下に減少する自治体」が目安とされている。この結果、全国の市区町村の半分にあたる896自治体が指定されている。青森、岩手、秋田、山形、島根の5県では8割以上の市町村に「消滅可能性」があると指摘され、早急な人口対策が検討されることとなった。ちなみに20～39歳の女性は、「統計的に子どもの大半をこの年代の女性が産み、次世代の人口再生産を左右する」という集団とされているが、むしろ日本の人口(家族)問題は、男性の意識や価値観、働き方により大きな影響を受けている側面もあり、女性の生き方のみがこの問題の焦点となっていることに疑問を示す意見もある。
- 2) 持続可能な開発(Sustainable Development)の中では、持続可能性とは「現在の世代の欲求を満たしつつ、将来の世代の欲求も満足させる発展性」と定義されている(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/>)



- gaiko/kankyo/sogo/kaihatsu.html 最終閲覧2018年9月30日)。本研究では「人びとの居住の場としての地域」における持続可能性を考えようとするため、この定義を採用したい。
- 3) 機業圏とは、機屋から依頼された絹織物を農家が賃織り（賃機）して、製品を機屋に納める賃織の範囲を指す。問屋制家内工業とも呼ばれる（斎藤 2009）。
  - 4) 「高機（たかばた）」とは、手織り機の種類。腰板に掛け、足で踏木を踏んで綜統を上下させて、織物を織る。構造全体が高い機織り機のこと。棚機とも呼ぶ（桐生市老人クラブ連合会・NPO 法人桐生地域情報ネットワーク編 2004）。
  - 5) 「八丁撚糸機」とは、撚糸機の種類で、下管に巻かれた生糸に、水をかけながらさらに決められた回数のひねりを加え、生糸に強度と独特の質感を作り出す機械のこと（桐生市老人クラブ連合会・NPO 法人桐生地域情報ネットワーク編 2004）。
  - 6) このような技術革新と機械化の進展により桐生の織物工場は、のこぎり屋根を持つ織布工場が展開するようになった。
  - 7) パチンコやミシンなどの製造業は、たとえばジャガード機の修理技師など、もともと機業をベースとした人材や技術により展開したものである。たとえば、自動車産業が、もともとは織機の技術、機械類の整備を基盤とした産業であることは有名である。
  - 8) 近年では、機業産業の構造が変化、衰退していったがゆえ、近年では「のこぎり屋根」に特徴づけられる織物工場の建物（約261棟）の保存、並びに繊維（ファッションタウン桐生等）を資源とする観光産業が脚光を浴びている（矢作 2004）。
  - 9) ただし、世帯数は緩やかに増加傾向を示している。この背景には、市内の世帯規模の小規模化が進行していることがある。
  - 10) はじめはB家に元々いた養子（女性）の婿としてBさんを迎えることが予定されていたが、その養子は別の家に嫁いでしまったため、Bさん夫婦は「夫婦養子」という形になる。

#### 【謝辞】

本論文は、平成23年度群馬県地域・大学連携モデル事業「『空き家』を活用しながら、まち再構築する抜本的、具体的な施策の調査研究」、および平成24年度群馬県立女子大学特定教育・研究費「『空き家』をめぐるライフストーリー収集の試み—群馬県桐生市を事例として—」による研究成果の一部である。論文執筆にあたり、桐生市役所産業経済部観光交流課ならびに桐生市にお住まいの皆さまには、多大なる御協力を頂きました。心より御礼申し上げます。

#### 文献

- 相澤亮太郎 2005. 阪神淡路大震災被災地における地藏祭祀一場所の構築と記憶—。人文地理第57巻第4号：62-75.
- 井上 考・渡辺真智子編著 2014. 『首都圏の高齢化』。原書房.
- 大久保孝治 2009. 『ライフストーリー分析—質的調査入門』。学文社.
- 北澤 毅・古賀正義編 1997. 『〈社会〉を読み解く技法—質的調査法への招待』。福村出版.
- 桐生市史編纂委員会 1961. 『桐生市史 下巻』。桐生市.
- 桐生市老人クラブ連合会・NPO 法人桐生地域情報ネットワーク編 2004. 『桐生お召しと職人の系譜』。桐生市老人クラブ連合会・NPO 法人桐生地域情報ネットワーク.
- 群馬大学教育学部地理学教室・群馬大学地理学会編 1989. 『からっ風産業—ぐんまの風土産業』。上毛新聞社.
- 桐生南ロータリークラブ「桐生の歴史を聞く会」 2010. 『桐生の歴史を語る—佐羽秀夫・卓話集—』。桐生南ロータリークラブ.
- 斎藤 功編纂 2009. 『日本の地誌 6 首都圏Ⅱ—群馬県・栃木県・茨城県・長野県・山梨県・新潟県』。朝倉書店.

- 桜井 厚編 2003. 『ライフストーリーとジェンダー』. せりか書房.
- 桜井 厚・小林多寿子2005. 『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』. せりか書店.
- 日本創成会議・人口減少問題検討分科会 2014. 成長を続ける21世紀のために—ストップ少子化・地方  
元気戦略. 日本創成会議・人口減少問題検討分科会報告書：1-51. 内閣府.
- 平川克美 2009. 『経済という病—退化に生きる、我ら』. 講談社.
- 平川克美 2012. 『小商いのすすめ—「経済成長」から「縮小均衡」の時代へ』. ミシマ社.
- 広井良典. 『ポスト資本主義—科学・人間・社会の未来』. 岩波書店.
- 増田寛也 2014 『地方消滅—東京—極集中が招く人口急減』. 中央公論新社.
- 矢作 弘 2004. 『産業遺産とまちづくり』. 学芸出版社.
- 山口恵一郎 1975. 『日本図誌体系 関東Ⅱ』. 朝倉書店.
- 山田富秋・落合恵美子 2008. はじめに—シンポジウム「オーラル・ヒストリーと歴史」へのまえがき  
として—. フォーラム現代社会学7：45-48.
- 若林幹夫 2009. 郊外, ニュータウンと地域の記憶—集会的記憶の都市社会学試論—. 日本都市社会学  
会年報27：1-19.
- Atkinson, R. 1995. *The Gift of Stories*. Bergin & Garvey, USA. (ロバート・アトキンソン著/塚田 守翻  
訳2006. 『私たちの中にある物語—人生のストーリーを書く意義と方法』. ミネルヴァ書房.)
- Mattingly, D. and Falconer-Al-Hindi, K. 1995. Should Women Count? A Context for the Debate. *Professional  
Geographer* 47-4: 427-435.
- Moss, P. 2002. Taking on, Thinking about, and Doing Feminist Research in Geography. In Moss, P. ed.  
*Feminist Geography in Practice*, Blackwell, London, 442-449.